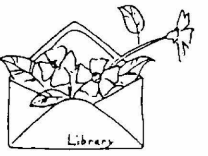
全国研印象記



●神戸私見

岡村　慶子（国立東京第二病院）

9月3日、4日に兵庫県民会館で全国図書室研究会が開かれ、全国から70名あまりの参加があった。

今回のテーマは「資料の保存」であった。

「資料保存の考え方」では二宮嘉須彦氏が利用も着眼点に入れること、紙の寿命は100年位であるがCDの耐久年数推測値は10～30年に過ぎないので、保存形態の選択には慎重を要すると述べられた。

「分担保存」実際例では、昼馬逸郎氏が中国四国地方の大学医学図書館間における雑誌の分担保存を紹介された。

「シンポジウム」においては、加島民子氏が近畿病院図書室協議会内での分担保存実現化への経過と方法を、各図書館での整理業務としては、飯田育子氏が廃棄基準について詳しい資料に基づいてそのあり方を発表された。その後の討論会ではテーマが期に即していたため、活発な意見が交わされた。

その他、講演では前田章夫氏が著作権について述べられ、この法の改正によりコピーの単価が上がったり、ファックスによる相互貸借に支障を来す可能性もある等、図書館にも切実な法律であることが認識された。

また、新しい情報メディアとして平山恵三氏がADONISを取り上げられた。これは医学関連誌が約400種CD-ROMに収録され、タイムラグも2週間程度なので、まさに机上の図書館に相当する。今後、図書室はますます情報集積の場となるであろうが、情報をいかに駆使するかが重要な課題となろう。

「特別講演」では、鶴見俊輔氏が数人の作家の例を紹介し、含蓄ある言葉を引用されたのがたいへん印象深かった。

現在、全国各地で病院図書室の結束が図られ、研究会がもたれている。それぞれ抱える問題は違うものの、どれもがある段階で経験することなので、このような全国規模で会が催されることは有意義だと思う。洗練された神戸の街の一角で充実した会をお世話くださいました皆様ありがとうございました。

●特に分担保存について

佃　貴美子（阪和記念会館）

「資料の保存について」というメインテーマの中で、私の関心を特にひいた講演は「バックナンバーの分担保存制度」と、シンポジウムで取り上げられた「病院図書室における資料の保存と廃棄」でした。

情報化社会の今日、いつも手軽に利用されるべき病院図書室には、求められる情報・資料を迅速にユーザーへ提供する使命を果たすために資料をできるだけ豊富に揃えておきたいと考えています。しかし増えるばかりの資料に頭を痛めているのが現状です。

昼馬逸郎氏の分担保存制度に至るまでの講演は、今図書室が目前に抱える問題の解決策に思え、たいへん興味深く聞かせていただきました。当図書室においても、スペースの問題を思うと一刻も早く病図協内で分担保存が可能となるように願っています。しかし、実際その時どれだけの雑誌を廃棄する勇気があるかといえば、大きな課題が残りそうに思えます。また、昼馬氏のお話の中で、『病院図書室は、もっと大学に依存してもよいと思う』というありがたいお言葉が私の頭に鮮明に残りました。大学図書館の方々全てにそのように考えていただけると、資料保存問題の新しい解決にも一歩近づけるような気がしました。

今回の全国研に出席させていただき、ブラウジング効果の高い雑誌の保存と廃棄問題について改めて認識でき、これからの課題を見つめ直すことができました。